

NOTE BOOK

長期休館中の
美術館活動ノート



RESEARCH

OUTREACH



新潟市新津美術館

NIITSU
ART MUSEUM



2025-2026

Introduction	01
第1部 所蔵品調査(所蔵品紹介)	
制作への渴望と人の縁―笹岡了一《纏足》	02
生きた証を刻む―砂井正七の肖像画―	03
画家・渋谷和之と《カトリック新潟教会》について	04
大竹伸朗《日本景／夏の海》について	06
藤田嗣治《於那覇》について	07
ブラチ斯拉バ世界絵本原画展出品作について	08
第2部 休館中のアウトリーチ活動	
Ⓐ えのぐでなにができるかな	10
Ⓑ かんたん絵本づくりワークショップ	11
Ⓒ 美術講座リバイバル	12

Introduction

新潟市新津美術館は、2025(令和7)年6月9日から2026(令和8)年5月22日までの予定で、屋上屋根の防水処理、貨物用エレベーターおよび防災機器入れ替え等の改修工事のため長期休館しています。この間、展覧会などの活動を、工事中の仮囲いに覆われた当館内で行うことはできません。美術館に来館してもらうことのできない現在、市民が美術に触れる機会を作るという当館の使命を果たすには何ができるか。この一年弱、新津美術館が模索しながら実施してきた、長期休館中だからこそ行うことができた取り組みを本冊子にて大別して以下ふたつ紹介します。

まず、所蔵品調査の成果の一端を6編、紹介します。過去展覧会出品時に解説のために調べたことや、新収蔵にあたって調査したこと等、所蔵品の調査研究成果が当館には蓄積されています。しかしこれらの多くは、いつでも市民が触れられるかたちでの記録には未だ至っていません。休館中は来館者を迎える業務が無く且つ工事にもなると一部作品に館内移動の必要が生じたこともあり、所蔵品の整理や状態確認といったケアにより時間を割くことができ、資料調査が進みました。このことが本冊子の作成に結びつきます。地道な調査研究の途にある今回の上梓が、これまで展示によって度々親しまれてきた或いはまだ出品機会の少ない所蔵品の、後世に残す市の財産としての新たな文化的価値発見につながれば幸いです。

もうひとつには、新たなアウトリーチ活動が挙げられます。当館ではこれまで、「出前美術館」として学校現場等で好評のうちに実施されてきた鑑賞と制作のアウトリーチ事業や、美術館のレクチャールームにて学芸員が美術にまつわる様々な関心事について話す「美術講座」を行ってきました。例年実施してきたこれらの教育普及事業の多くは、休館中も館外に会場を借りる等して継続実施を図りました。休館中はそれらに加え、来館してもらうことがかなわない今だからこそむしろあまり美術館に来る機会のない市民にリーチし、美術に触れる機会を新たに作ろうと取り組みました。本冊子ではこの新たなアウトリーチ活動について特記して紹介します。表現の多様さや自他の感性の違いを楽しむ場を、美術館の外に作り出すことを目指して企画した活動です。

本冊子を通じ、一見すると文字通り休んでいると思われがちな改修休館中の新津美術館が、その内外で進めてきた「美術館活動」の一側面をご覧ください。

2026年3月
新潟市新津美術館

制作への渴望と人の縁 — 笹岡了一《纏足》

奥村 真名美

新潟市新津美術館は、1992年に洋画家・笹岡了一（1907-1987）の絵画163点が旧新津市（現新潟市秋葉区）に寄贈されたことを契機に、1997年に現在の地に「新津市美術館」として開かれた。同作品群は2005年に「新潟市新津美術館」と改称した後も、コレクションの中核を成している。

2024年に開催した企画展「新潟市新津美術館所蔵品による 笹岡了一と新潟光風会の作家たち¹⁾」では、笹岡とその関連作家の作品を紹介した。同展の開催に向け行った調査や関連イベントを通して、改めて確認できた事柄の一端を記しておきたい。

洋画家として活動し、かつて笹岡と親交を持った中野雅友氏、本間ケイ氏、堀研一氏、山田一郎氏は、「絵描きとして大切なことを学んだ」「寡黙だが、言うことが心に残る」「雲の上の存在」「本当に心の温かい人」等の言葉で、敬愛の意を表し人柄を偲んだ²⁾。着眼点は違えども、印象深い笹岡作品として、中国服に身を包み凛と佇む女性を描いた《纏足》（1946年、第2回日展出品作）[図1]を挙げる声が多かった³⁾。

同作は、出征した笹岡が中国の民家で見つけた女性の写真に着想を得たもので、戦地から戻ってすぐに絵筆を走らせた作として伝わる。千葉県流山の自宅で笹岡の帰りを待っていた妻の秋元松子は、帰ってきたらすぐ絵が描けるようにと、画材一式一絵具、真っ新のキャンバス等一揃えを揃えて待ち続けており⁴⁾、笹岡の希望を受け止め、また画才を信じ必要な道具を揃えていた秋元の思いも偲ばれる。それらを使って描かれた渾身の作⁵⁾であり、女性の姿を描くにあたっては、スケッチを重ねて制作に臨んだ。

収集活動が結実し、笹岡作品が広がりを持って捉えられるようになるも、生前の笹岡を知る人は少なくなった現在。笹岡の《纏足》が、自身も画業に身を置く関係者から改めて紡がれた言葉を通して、先達への畏敬の念と制作を支えた人の縁を表す色褪せぬ代表作であることが確認できた。

（おくむら・まなみ 新潟市新津美術館 学芸員）

- 1 2023年度の新潟市新津美術館企画展として、2024年1月20日～3月10日の会期で開催。
- 2 企画展関連事業、アーティストトーク「わたしと笹岡了一」を開催（2024年1月28日本間ケイ氏、2月23日山田一郎氏、3月3日中野雅友氏、3月9日堀研一氏／開催日順）。新潟光風会等で笹岡と親交を持った際の思い出や自身の作家活動について、会場内で一人ひとり話していただいた。調査時やイベント当日のコメントから抜粋。



図1 笹岡了一《纏足》1946年
油彩、カンヴァス 116.7×91.0cm
新潟市新津美術館蔵

- 3 本作は長く笹岡のアトリエ入口に飾られ、大切にされていた。「にいがた戦後80年 激流の中で 県人作家が描いた戦争⑤」『新潟日報』2025年8月22日、18面
- 4 戦時中、笹岡と自身も画家であった秋元松子は軍事郵便のやりとりを続けており、その量は柳行李いっぱいになるほどであった。その中には当時の状況、心情、制作に対する思いやスケッチ等が認められていた。兩名の養女である秋元由美子氏と註2に挙げた四者も本件を印象深く受け止めている。
- 5 2024年1月28日、本間ケイ氏のアーティストトークに同席した秋元由美子氏のコメントより。

生きた証を刻む —砂井正七の肖像画—

小野 百合香

砂井正七まごい しょうしちは1897(明治30)年、新潟県中蒲原郡小須戸町(現新潟市秋葉区)に生まれ、1923(大正12)年に亡くなった画家である。地元の小学校を卒業した後、新潟市の骨董店に住み込みで働きながら独学で絵を描いた。1917(大正6)年、中蒲原郡村松町(現五泉市村松地区)の連隊に徴兵され、除隊後は絵の制作に専念する。1923年の冬に西蒲原郡(現新潟市西蒲区)の角田浜へ写生に出かけ、寒風にあたったのが原因で肺炎を発症し、その年の3月に死去した¹。

新潟市新津美術館では砂井の油彩画を一点所蔵している[図1]。描かれているのは画家の実兄、正平である。作品のキャンバス裏面には「大正十年一月砂井正七写」と年記および署名があり、「砂井正七氏遺作展覧会」の目録[図2]が付帯されていた。遺作展には油彩画28点、水彩画2点、素描33点が出品されたと記録があり、本作はこのうち同展覧会に出品された《兄の肖像》である可能性が高い²。現在所在が明らかかな砂井による油彩画は《兄の肖像》を含めてわずか4点のみであり³、本作は数少ない現存作のひとつと言える。本作はキャンバスを木枠から外して巻いた状態で長年保管されていたのか、2022(令和4)年度に寄贈を受けた時点で劣化や損傷が見られた。この状態ですぐに展示公開することは難しいが、今回収蔵後初めて紹介することで、寡作の画家による希少な油彩の作例を広く周知する機会としたい。

ここからは、本作の画面に目を向けていく。描かれた兄の顔は細部まで観察され、眉間や口元に刻まれたしわ、頬のくぼみに落ちる影、下脛の皮膚のたるみといった特徴が、骨太な線と深みのある色調で克明に描かれている。本作に見られる、人物の胸部から頭部までを収めた構図や暗色で塗りつぶした背景、写実的な描写といった特徴は、現存する砂井の油彩画に共通するものであり、これらは当時画家が尊敬していた岸田劉生をはじめとする「草土社」の作風に影響を受けたものと考えられる⁴。

現存する砂井の油彩作品は何れも身近な人物の肖像画だが、そこに描かれた人物の顔は生きた歳月を生々しく刻み、その表情や仕草はふとした瞬間を切り取ったように自然で飾り気がない。真摯で丁寧な観察によって描かれた本作もまた、人物が確かにその時代を生きていたのだと証明する、力強い生命力を感じさせる。

(おの・ゆりか 新潟市新津美術館 学芸員)

1 新潟市新津美術館編著『幻の画家 砂井正七作品集』新潟市新津美術館、2012年、p.3



図1 砂井正七《兄の肖像》1921年
油彩、キャンバス 51.5×45.0cm
新潟市新津美術館蔵



図2 『砂井正七氏遺作展覧会目録』1923年
22.5×16.5cm 新潟市新津美術館蔵

- 2 遺作展は砂井が死去した年の5月17、18日に、友人らの計らいによって新潟図書館(新潟市中央区寄居町、旧新潟県立図書館)にて開催された。
- 3 そのうち1点は新潟市美術館所蔵の《自画像》(1920年)である。
- 4 砂井は過去に岸田のもとを訪ねて弟子入りを志願したこともあった。砂丘館WEBサイト「砂井正七遺作展」より <https://sakyukan.jp/clip00/kuri03.html> (最終閲覧日2026年1月15日)

画家・渋谷和之と《カトリック新潟教会》について

石月 裕子

新潟市新津美術館所蔵の《カトリック新潟教会》[図1]は、新潟県中蒲原郡亀田町(現新潟県新潟市江南区亀田地区)出身の画家・渋谷和之(1937-2005)による水彩画である。当館に残されている資料によると1996年頃に株式会社新潟放送(BSN)元社長である清水誠一氏から当時新津市石油文化振興財団が運営していた石油の世界館へ寄贈され、2006年に当館へ移管された作品46点のうちのひとつだ。

作家、作品ともに情報が少なく不明な点が多かったが、この度、遺族の協力によりまとまった資料が提供され、調査の機会を得た。本稿はこれまで知られることのなかった渋谷和之の画業と、当館では唯一の所蔵作品である《カトリック新潟教会》について、現時点までの調査に基づき概観するものである。

画業

渋谷和之は1937年生まれ。学生時代から絵を描くことが好きで、職に就いてからも制作に勤しんだ。30代までは新潟県内及び近隣地域の山や漁港、工場、人物等、比較的身近な題材を扱ったが、1975年以降海外でスケッチするようになってからは、主にヨーロッパの街並みを画題に油彩画の制作に打ち込んだ。

二科展を中心に出品し、1969年第54回二科展で初入選を果たす。旅先のモロッコを描いた《カスバの街Ⅰ》が1981年の第66回二科展で特選。1987年には同会の会友となり、1995年に第80回二科展会友賞を受賞する。県内においては新潟県芸術美術展(芸展)に1972年の第1回から会員として毎年出品。1974年の第29回新潟県美術展覧会(県展)にて奨励賞を受賞した。

1986年2-3月、週刊『新潟日報ウィークリー』の表紙絵を担当する。カトリック新潟教会や旧新潟税関など新潟の風物を描き、各原画は抽選で読者に進呈された。また、1999年には『新潟日報』夕刊にエッセイ「ヨーロッパスケッチ旅情 私の画帳から」全15回を寄稿した。

1992年より自宅にて絵画教室を開く。退職後、2000年には絵描き仲間を募った海外スケッチグループ旅行を主宰し、以降これが毎年恒例となる。初回に訪れたスペインで強く印象に残った町の名から「カサレス会」と命名し、2003年新潟市美術館の市民ギャラリーで作品展を開催。同会の活動は現在も有志たちに引き継がれている。

2005年5月、新潟県美術家連盟理事に就任するも、同年8月に急逝。そのため同連盟役員としてその名が記載されている刊行物は少ない¹⁾。

《カトリック新潟教会》について

本作品の特徴は教会を裏側から捉え、前景に塀を入れた構図にある。片側が開放された裏門扉から始まる平坦な道がすぐ先の聖堂へと続き、後景には教会のシンボルともいえる双塔が建つ。画面左右の大きな裸木や所々に配された残雪が寒々しい。本作とほぼ同じ構図のスケッチ[図2]を作家のアトリエで発見し、当初は現実の風景を描いたのかと考えたが、実際の景色²⁾とは大きく異なる。ゆえにスケッチの段階



図1 渋谷和之《カトリック新潟教会》
制作年不明 水彩、紙(色紙)
24.0×27.2cm 新潟市新津美術館蔵

1 筆者が確認できたのは『新潟県美術家連盟会員名簿平成17年・平成18年』(2005年) p.10、『新潟県美術名鑑』新潟日报社(2005年) p.141、『新潟県美術家連盟会報』第68号(2005年8月31日) p.6の3点。



図2 渋谷和之 スケッチ 制作年不明
個人蔵

2 本作のテーマである同教会は正面が南東を向いている。裏手は西側から回りこむように大きく湾曲した上り坂となっており、その坂の途中に塀と裏門扉がある。敷地唯一の裏門扉であり、この位置に設置されてから移動したことはない。その門扉から階段を下り、カトリック新潟教会本部の建物脇を通り過ぎ、更に駐車場を抜けた先に聖堂がある。その距離はゆうに100mを超える。

- 3 翼廊と後陣および隣接する建物(当時は保育園と修道院だった)の屋根の重なり具合から推測すると、堀の右側から見て聖堂をスケッチしたと考えられる。
- 4 渋谷和之「ヨーロッパスケッチ旅情 私の画帳から」『新潟日報』(夕刊)1999年12月2日、p.6

から作家が不要と判断した箇所を省略し、奥行きにも高低差にもとらわれず複数の視点³を組み合わせ自由に描いたものと思われる。渋谷本人が渡航先の街並みをデフォルメしてスケッチしたと記したエッセイもあり⁴、こうした取り組み方が珍しくなかったことを示唆している。なお、制作年は不明だが、前述したスケッチが入っているスケッチブックに1981年の日付が書き込まれたページがあることから当館所蔵品の制作年も同年前後と推定する。

結びとして

今回の調査で、画歴が詳らかでないままに所蔵されていた渋谷和之が、地元の美術振興に寄与し、当時少なくない市民に親しまれた作家であったこと、また没後20年を経てなおその活動を引き継ぐ後進がいることが判明した。さらに所蔵品の制作年の推定ができ、主題が現実の風景ではなくコラージュされた再構成であることも分かった。これらの調査が、地域の美術に光を当てるといふ地方美術館が担うべき役目のひとつに貢献できたとすれば幸いである。

最後に本稿執筆にあたり、作家遺族(妻)の渋谷ヤホ氏、宗教法人カトリック新潟教区町田正神父、同教区事務局長大瀧浩一神父をはじめ、調査にご協力くださいました皆様に深謝申し上げます。

(いしづき・ひろこ 新潟市新津美術館 学芸員)

渋谷 和之 しふや かずゆき 略年譜

1937	昭和12	0歳	・7月29日 新潟県中蒲原郡亀田町(現新潟市江南区亀田地区)に生まれる
1955	昭和30	18歳	・新潟明訓高等学校卒業、新潟臨港開発株式会社(現株式会社リンコーコーポレーション、新潟市)に入社
1957頃	昭和32頃	20歳頃	・株式会社文久堂(新潟市)に入社
1964	昭和39	27歳	・第19回新潟県展初入選
1965	昭和40	28歳	・初グループ展(三人展)(於香月画廊、新潟市)
1967	昭和42	30歳	・初個展(於香月画廊、新潟市) 2005年までに個展21回(於新潟市内画廊、新潟三越、池袋東武等)
1969	昭和44	32歳	・第54回二科展《発掘Ⅲ》初入選
1974	昭和49	37歳	・第29回新潟県展《タンクのある風景》奨励賞
1975	昭和50	38歳	・初ヨーロッパ旅行(スペイン等7カ国)
1980	昭和55	43歳	・海外スケッチツアーに参加(ポルトガル、モロッコ、スペイン)
1981	昭和56	44歳	・第66回二科展《カスバの街Ⅰ》特選
1986	昭和61	49歳	・『新潟日報ウィークリー』表紙絵に掲載 2月7日(金)から毎週掲載 全8回
1987	昭和62	50歳	・第72回二科展《アッシジの街通り》 会友推挙
1992	平成4	55歳	・渋谷アトリエ絵画教室を主宰
1995	平成7	58歳	・第80回二科展《白い街ミコノス》会友賞
1999	平成11	62歳	・「ヨーロッパスケッチ旅情 私の画帳から」『新潟日報』(夕刊)9月2日(木)から毎週連載 全15回
2000	平成12	63歳	・海外スケッチグループ旅行を主宰 2005年まで毎年催行 後に「カサレス会」と命名
2002	平成14	65歳	・第6回亀彩会(渋谷アトリエ絵画教室)作品展(於新潟市美術館市民ギャラリー)
2003	平成15	66歳	・カサレス会展(於新潟市美術館市民ギャラリー)
2004	平成16	67歳	・二科選抜作家ニューヨーク・ハワイ巡回展《失われた街》出品
2005	平成17	68歳	・新潟県美術家連盟理事就任 ・8月24日 没
2006	平成18	—	・4月《カトリック新潟教会》を石油の世界館(現新潟市秋葉区)から新潟市新津美術館へ移管
2013	平成25	—	・9月10日～9月23日 《カトリック新潟教会》展示(於江南区郷土資料館) ・10月26日～(翌2014年)1月18日 コレクション展「新潟の風景」にて同作品展示(於新潟市新津美術館)
2017	平成29	—	・1月25日～2月7日 新津美術館所蔵展「なつかしき新潟の町」にて同作品展示(於日報ギャラリーえん、新潟市)

大竹伸朗《日本景／夏の海》について

大野 智世

大竹伸朗(1955-)の《日本景／夏の海》(1997年)[図1]は、1998年に当館で開催した個展「大竹伸朗『新津 あいまいで私が日本』」に際して制作され、その後、作家より寄贈された作品である。本稿は、直近の出品機会に改めて調査した本作の制作過程や、実際の展示方法について記録・周知することを目的としている。

日本の現代美術を代表する作家のひとりである大竹伸朗。絵画や版画、立体作品に加え、絵本や小説、音楽活動など、制作の範囲は多岐にわたる。2012年には現代美術の国際展ドクメンタ13(ドイツ)に、2013年には第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ(イタリア)に参加するなど、国際的にも高い評価を得ている。近年では、2022年に東京国立近代美術館(愛媛、富山に巡回)、2025年に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館において大規模な個展を開催し、膨大な作品群によって半世紀に及ぶ活動とその現在地を示した。

当館では、他の公立美術館に先駆け1998年に大竹の個展を開催。「大竹伸朗『新津 あいまいで私が日本』」と題した展覧会は、前年10月に誕生したばかりの当館の開館記念事業の一環であり、現代作家を招聘し、新津という地域や美術館の展示空間から企画を構想する展覧会シリーズ「ラボラトリー」の皮切りだった。大竹は、個展開催の2、3年前から徐々に自身の「内側で頭をもたげてきた日本の奇妙な風景²」と美術館側の企画意図を結びつけ、展覧会の基本的なテーマを「日本」へと広げた。旧新津市を訪れ街中を探索するなかで、大竹の興味を引いたのは、名所や特産品ではなく、「ふらりと立ち寄った喫茶店の何の変哲もないマッチのデザインや、どこにでもある商店街の看板³」などが多かったという。本作《日本景／夏の海》には、旧新津市内の工業団地で廃棄されようとしていたブリキの看板やステンレスの板がそのまま用いられ、制作の背景に新津地域とのつながりが深い。アルファベットをかたどった大きな文字盤は、当時、日本全国に展開していたアミューズメント施設のものである。展示室に持ち込まれ、作家によって任意の配置に組み換えられた11文字の看板の上には、女性の顔をかたどったネオン管が発光している。このネオンサインは拾い集めたものではなく、同展で展示されたドロ잉《ぬりどき日本列島／「宮島」》(1997年)に基づき、旧新津市内に工場を置く業者によって新たに製作された⁴。

個展の閉幕後、本作は2006年に東京都現代美術館で開かれた展覧会「大竹伸朗 全景 1955-2006」で紹介された。その後、2025年に当館で開催した展覧会「共鳴、あるいは不協和音 新潟市美術館と新潟美術館の両館所蔵品による」に出品し、19年ぶりの展示機会となった。その際、細部の状態の点検を行ったところ、もともと廃棄物だった看板には細かな傷が多くあるものの、経年による金属部分の腐食など大きな劣化は見られず、ネオン管も問題なく点灯することが確認された。個展開催時とは異なる展示室に設置したため、愛媛県宇和島市在住の作家に遠隔で設営方法を確認しながらシミュレーションを進め、安全な設置のため展示具を新調するなどの対応を行った。大型で光を放つ立体作品である本作は、展示に一定の難しさが伴う。しかしながら、新津地域にとっても日本の現代美術においても重要な作品であることは確かであり、今後もさらなる活用を図っていきたい。

(おおの・ともよ 新潟市新潟美術館 学芸員)



図1 大竹伸朗《日本景／夏の海》1997年
ネオン管、ステンレス、ファウンド・オブ
ジェクト(ブリキ)
新潟市新潟美術館蔵
撮影：中野正貴

- 1 会期は1998年1月6日～3月15日。展覧会開催当時の美術館の名称は新潟市美術館。市町村合併により2005年に新潟市新潟美術館と改称。
- 2 大竹伸朗「あいまいで私が日本」『ぬりどき日本列島』新潟市文化振興財団、1998年、ページ番号なし
- 3 大竹伸朗「宇和島美術ノート」『波』第31巻第10号、1997年、p.34
- 4 本作の文字盤部分を廃棄のために保管していたのも当該業者であり、且つ大竹の代表作のひとつである《宇和島駅》(1997年)に組み込まれた明滅するネオン管の製作も同業者が行った。

藤田嗣治《於那覇》について

長島 彩音

藤田嗣治(1886-1968)による《於那覇》[図1]は、水彩によって部分的に淡彩が施されたドローイングである。藤田と旧蔵者である新潟の画家との交流がうかがえる作品であり、日本に帰国していた時期の藤田と新潟地域との関わりを示す貴重な資料と言える。本稿は、それにもかかわらず2017年度の収蔵以来展示機会の少なかった本作について、改めて紹介するものである。

言うに及ばず美術史に名を遺す世界的な画家であるが、まずは藤田の略歴を確認したい¹。東京美術学校卒業後の1913年に渡仏した藤田は、モディリアアーニやスーチンらとともにエコール・ド・パリを代表する作家として活躍。その乳白色の絵肌と瀟洒な作風が高く評価されて1920年代のパリで一躍人気を博す。1931年にパリを離れ、1933年に帰国して日本画壇で活動した。日中戦争や第二次世界大戦に従軍して戦争記録画を制作し、戦後、戦争画家としての責任論に晒された。ニューヨークを経てパリに戻り、1955年にフランス国籍を取得。晩年はカトリックに帰依し、宗教画の制作にも取り組んだ。

さて、本作画中には「為斎藤應志兄 於那覇 嗣治 1938」と書かれている。当館収蔵時、作品名《於那覇》はここから付された。藤田は1938年4月に沖縄を訪れており、このときの取材をもとに《客人(糸満)》(1938年、財団法人平野政吉美術館蔵)や《孫》(1938年、沖縄県蔵)を制作、同年の二科展に出品している。本作もこの沖縄滞在中に描かれた。

画中の為書に記された本作旧蔵者、斎藤應志(1903-1981)は新潟の洋画家である。公立学校教諭として勤務しながら画業を志し、在野の画家たちの団体展である旧新潟県展²の創設に尽力。同展の事務も担っていた³。一方、藤田は第7回旧新潟県展(1936年)で審査員を務めており⁴、同展が両者の仲らのきっかけのひとつと推察できる。ただ審査員依頼の経緯は詳らかでない。藤田が旧新潟県展で審査員を務めていたことも、おそらくその縁で新潟に作品が残されていたこともこれまであまり顧みられてこなかったが、本作は藤田の交友を知る上でも同時代の新潟地域の美術動向の証左としても重要な作品と言えるだろう。

なお、1930年代後半、藤田は新潟県内にたびたび縁があった。1935年に軽井沢から青森までの行程で佐渡、新潟を含む日本海側を旅行しており、日本海側への来訪はこの時が初めてだったという⁵。そして前述のとおり翌1936年に旧新潟県展審査員を務め、1937年には県内で3回個展を開催した⁶。

本作の1938年という年記から、両画家のやりとりが旧新潟県展審査員以後も続いていたことが分かる⁷。今回、本作とともに当館にもたらされた斎藤應志所有のハガキ等資料について調査したが、両者の親交が分かるものは確認できなかった。また斎藤の旧宅には過去、藤田の手になる作品がもう1点があったとも伝わっている。当該作品は油彩の風景画で、斎藤が新潟市内の美術関係者へ見舞いの品として贈ったらしい⁸。その油彩の現存は確認されていない。

藤田嗣治と新潟との関わりについて、旧新潟県展審査員依頼の詳細な経緯や斎藤應志旧蔵のもう1点の藤田作品の所在を含め、今後のさらなる調査が待たれる。

(ながしま・あやね 新潟市新津美術館 学芸員)

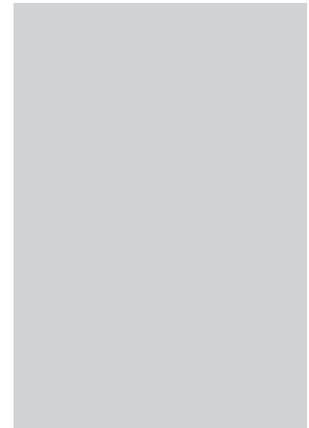


図1 藤田嗣治《於那覇》1938年
鉛筆、水彩、紙 31.4×21.0cm
新潟市新津美術館蔵
©Fondation Foujita/ADAGP, Paris &
JASPAR, Tokyo, 2025 G4098

- 1 藤田嗣治の経歴は、特に註釈の無い場合、以下を参照した。
『生誕120年 藤田嗣治展』カタログ(東京国立近代美術館ほか、2006年)に所収の年譜(尾崎正明編著)
- 2 正しくは「新潟県美術展覧会」であるが、この戦前の新潟県展は、同名ながら戦後に新潟日报社が主催して始まった現行のそれとは全く異なる。区別のために旧新潟県展と呼ばれている。
- 3 山浦健夫『記憶の中の展覧会』ウインド出版、1988年、p.39
- 4 同上、pp.209-237および
本井晴信「戦前にもあった県展」『新潟県美術名鑑：新潟県美術展覧会50回展記念』新潟日报社、1995年、p.113
- 5 藤田嗣治「裏日本」『隨筆集 地を泳ぐ』平凡社、2014年、p.239(「裏日本」の初出は『中央美術(復興)』第27号、1935年10月)
- 6 同年の新潟県内における藤田の個展とその受容、および1935年の佐渡、新潟旅行については以下に詳しい。
澤田佳三「新津記念館所蔵 藤田嗣治《千人針》《佐渡小木港》について」『新潟県立近代美術館研究紀要』第15号、2016年、pp.1-8
- 7 本作が斎藤の元へ送られたのがいつかは不明である。なお、沖縄旅行の半年後の1938年10月、藤田は軍の要請でこの前年に開戦した日中戦争の武漢作戦取材している。
- 8 斎藤元也「画家斎藤應志について」『斎藤應志・鐵臣二人展図録』胎内市美術館、2022年、p.89

ブラチスラバ世界絵本原画展出品作について

山岸 亜友美

新潟市新津美術館は、2025年度現在で54点の絵本原画を所蔵している。いずれも海外作家の手によるもので、ブラチスラバ世界絵本原画展(Biennial of Illustrations in Bratislava, 略称BIB)への出品歴を持つ。本稿ではこの内のいくつかを取り上げて紹介したい。

作品紹介の前に、BIBそれ自体と所蔵の経緯について簡単に確認しておく。BIBとは、2年に一度スロバキア共和国の首都ブラチスラバで開かれる国際的な絵本原画コンクールとその出品作を展示する展覧会を指し、その歴史は半世紀以上に及ぶ。1か国から最大10人までしかエントリーできず¹、厳しい選考を潜り抜けて世界中から集められた絵本原画は、国際審査を経てグランプリ、金のりんご賞、金牌といった賞に選出される。BIBを主催するスロバキア国際児童芸術協会(BIBIANA)は、絵本原画を通じた文化交流を積極的に進めることで各国の相互理解に寄与している。BIBの出品作は本国スロバキアで展示された翌年、各国の受賞作品と日本からエントリーした作品を中心に日本国内巡回用に内容を再編成し、公立美術館等で展示されてきた。現在の形で開催されるようになったのは2000年以降のことであるが、それ以前にも国内でBIB展は開かれていた²。1998年、当館が所在する新潟市では1997年のBIB出品作を紹介する展覧会が旧大和百貨店で開催されている³。その折に出品された絵本原画の一部が2012年度に当館へ寄贈されたことから、当館とBIBとの縁が始まったといえる。以下、この時収蔵した作品について述べる。

最初に紹介する作品は、スロバキア人絵本画家ヤナ・キセロヴァー＝シテコヴァー(Jana KISELOVÁ- SITEKOVÁ, 1942-)による《『アダムとエヴァ』より》⁴である。ヤナ・キセロヴァーは、A. リンドグレン、H.C. アンデルセンらの作品を含む40冊以上の本の挿絵を手掛け、1995年のBIBでは金のりんご賞、2021年のBIBではポスト・バンク賞⁶に選出されたほか、国際児童図書評議会名誉賞など数多くの賞を受賞する、スロバキアを代表するイラストレーターのみひとりである。彼女の作品は、「虫眼鏡を使って観察する」とよいと評されるほど細やかな筆致で描かれており、当館収蔵品にもその特徴がよく表れている。本作は、旧約聖書の物語をモチーフとした書籍『アダムとエヴァ』の挿絵で、いずれも綿布の上に水彩とインクで描画されている。このうち[図1]は、2021年のBIBで受賞した際に現地のカタログに掲載されていたことから、作家の代表作のひとつといえるだろう。なお本作は、2022年から2023年にかけてBIB2021が日本国内を巡回した際、この時のポスト・バンク賞受賞者の作品として千葉市美術館、東大阪市民美術センター、うらわ美術館で出品され、巡回の最終館である当館でも展示紹介した⁸。またこれを機に作家と連絡が取れたことも特筆しておく。

次に紹介する作品は、フィンランド人作家リータ・ウウシタロ(Riitta

- 1 JBBY. “ブラチスラバ世界絵本原画展”. <https://jbbby.org/bib/>, (参照 2026-1-21)
- 2 1994年8月、富山県の大島町絵本館でBIB展が開催されている。長谷川洋行『BIB'95日本展図録』森ヒロコ・スタシス美術館、1996年、p.83
- 3 日本巡回展である同展では、ブラチスラバで開かれたBIB'97の出品作のうち265点とヤナ・キセロヴァーの作品99点、計364点を展示した。室蘭市から始まり新潟市、高知県物部村など全8か所の市町村を巡回した。長谷川洋行『'98ブラチスラヴァ世界絵本原画展図録』森ヒロコ・スタシス美術館、1998年、p.8
- 4 図1以外の図版については、新潟市美術館・新津美術館 所蔵品検索システムを参照されたい。https://jmapps.ne.jp/ncam_collection/
- 5 Česká a slovenská škola Okénko. “Jana Kiselová-Siteková”. Okenko.uk. <https://www.okenko.uk/kiselovaacute-sitekovaacute-jana.html>, (参照 2025-12-19)
- 6 ポスト・バンク賞は、スロバキアのイラストレーションの発展に貢献した作家に贈られる。
- 7 Ondrej Sliacky, *Adam a Eva*, Illustrated by Jana Kiselová-Siteková, *Mladé letá*, 1994



図1 ヤナ・キセロヴァー＝シテコヴァー
《『アダムとエヴァ』より1》1994年
水彩、インク、綿布
25.2×35.0cm
新潟市新津美術館蔵

- 8 BIB2021の日本巡回展は、コロナ禍のため韓国以外からの絵本原画の借用が難しく、同国以外の海外作家の出品は本作のみであった。

UUSITALO, 1960-)が『ヴァルティアイネンとヘリコプター』という書籍に描いた挿絵である。主人公の男の子ヴァルティアイネンと彼の猫キッサクニンガスを軽快なタッチで描いたモノクロームのイラストレーションである。画面にはキャラクターとともに文章が書き込まれ、さながら漫画のひとコマにも見える。本作には、前述した1998年の日本巡回展以来、理由は不明であるが《英語で何て言うの?》というタイトルが付されていた。しかしこの度実際に出版された書籍を入手して調査したところ、書籍内の当該箇所と同様の文言が認められず、何らかの誤りと考えられる。その後の調査で本作以外の絵本原画のタイトルにもいくつか誤訳が含まれていることが判明したことから、今後の課題として、他の作品についても一つひとつ調査し確認する作業を進めていきたいと考える。また書籍を同定するため、蔵書を持つヘルシンキ中央図書館に問い合わせた。このように当館が所蔵する海外絵本原画の多くが2000年代以前に描かれ、出版された書籍が海外の中古市場でしか入手できないことが調査を難しくさせている。

最後の作品は、ロシア人作家キリル・チェルシュキン(Kiril ČELUŠKIN, 1968-)による《日本の昔話》である。作家は近年パリ等を拠点として彫刻に映像を投影するなどして作品を制作しているが、1994年にモスクワ建築大学を卒業した頃は挿絵の仕事をしていた。本作は、V.マルコワが日本の昔話をロシア語に翻訳してまとめ、童話集として1994年に出版した書籍⁹⁾に収められた図版の原画のひとつと思われる。この書籍の中には「耳なし芳一」や「幽霊船」といった12の昔話が収められており、チェルシュキンは物語ごとに数枚ずつの挿絵を描いている。本作は、このうちのОгневой Тароという物語¹⁰⁾の挿絵ではないかと推察される。ロシア語の本文¹¹⁾を日本語に翻訳したストーリーの概要は次のとおりである。遠い昔、お菊という少女がある男と出会った。彼の家には13個の蔵があり、12個までは開けて見てよいが、最後のひとつだけは絶対に開けてはいけないと注意を受ける。お菊が順に開けて見ていくと、蔵は暦と同じように1番目は新年、2番目は2月の風景といったように季節に応じた光景が広がっていた。当館に所蔵されている1点は、画面左下部に紅葉した木々が見えることから、秋の風景を描いた9番目の蔵の場面の挿絵ではないかと思われる。本文には「小人たちは(中略)時には急な坂を登り、時には深い谷へと下り、秋の紅葉を愛でていた。」とあり画面右側の描写と合致する。一方で画面上部に魚型の飛行船のようなものが3体浮かんでいるが、本文にはそのような言及は見られない。こうした描写の他にも中国風の衣装が描き込まれるなど、この時期の作家の作風が表れている。

2023年の展覧会開催の縁で、当館は2024年度、新たにフランス人作家によるBIB出品作2点の寄贈を受けた。今後も残りの海外絵本原画について調査研究を進めていきたい。

(やまぎし・あゆみ 新潟市新津美術館 学芸員)

9 原題はЯпонские сказки、直訳すると「日本の童話」である。

10 この昔話の類例として「見るな座敷」が挙げられる。

11 Огневой Тароの本文については以下のWEBサイトを参照した。
“Онлайн чтение книги Японские сказки (иллюстрации Кирилл Челушкин)”.
https://1.librebook.me/japonskie_skazki_illustracii_kirill_chelushkin/voll/10,
(参照 2026-1-21)

1. アウトリーチ活動の目的

- ・新潟市新津美術館が休館している間、当館学芸員が館外の施設に赴き講師を務め、市民が美術に触れる機会を創出する
- ・他の施設・組織と連携することで、普段あまり美術館を利用しない市民にも当館の社会的な存在意義について周知する
- ・将来の来館者である子どもたちに美術に触れる楽しさを伝え、美術館に関心を持ってもらう

2. 成果

実施回数 計13回、参加者数 延べ206人

3. 各活動のまとめ

A 「えのぐでなにができるかな」

- 主催：新潟市新津美術館、新津地区公民館、翠松保育園、キッズクラブ(阿賀小学校の放課後児童クラブ)、小合東小学校こどもふれあいスクール、新通小学校こどもふれあいスクール ※実施日による

- 実施日：7月28日(金)、8月6日(水)午前・午後、8月8日(金)、10月7日(火)、10月18日(土)

■経緯と内容

近年当館が行ってきた子ども向けの出張講座として「出前美術館」が挙げられる。市内の学校に地域のアーティストや学芸員が赴き、制作や鑑賞の面白さを伝える授業を行うものだが、これまでの課題として、低年齢向けに特化したプログラムができていなかった。このことから休館を機に、低年齢を対象とした新たなプログラム作りとその実践を行い、再開館後の教育普及を考える際の新たな視点を得ようと考えた。予算がないという課題については、過去に館で使った後しまいであったアクリル絵の具や絵筆等を用いることで対応した。感じるままに描くことの面白さを体感する本ワークショップは、市内4か所の保育園や小学校等で合計6回実施し、いずれも好評を得た。

■材料・道具

- ・床を養生するためのブルーシート
- ・アクリル絵の具(赤、オレンジ、黄、緑、青、紫)
- ・小型のバケツ、筆洗バケツ、筆、鉛筆
- ・不要になったポスター(人数分、予備)
- ・雑巾、手拭きペーパー、石鹸

■プログラム(一例)

- 9時30分～ 準備(床に養生、絵の具の準備)
- 10時15分～ 挨拶、自己紹介、紙芝居で美術館を紹介、絵の具の使い方をレクチャー
- 10時25分～ 各自が制作スタート
- 11時10分～ 作品の周りを歩きながら鑑賞、一人ずつ感想を述べてもらった

■参加者の声(抜粋)

- ・家でも絵の具をやっているけど、いつもより大きな紙にたくさん描けて楽しかったです。
- ・いろいろな絵が、ここで描いたら、いっぱい想像が浮かび上がって、どんどん描くのが止まらなくなって、とても楽しかったです。
- ・いろいろ図工では学べないことが学べた。
- ・絵がうまく描けてうれしかった。新潟市新津美術館に行きたい。

■まとめ

本プログラムは「○○を作ろう・しよう」というように決まったゴールを目指すものではなく、「何が起るかわからないワクワク感」を感じることを重視した。「唯一の正解」ではなく「個人にとっての解」を追求することの楽しさを体験し、さらには他の参加者の表現を見て「それもいいね」と受け入れる経験をしてほしいと考えた。それこそが制作にも鑑賞にも通じる美術の面白さだからである。計6回実施した本プログラムは、実施と反省を繰り返しながら内容をブラッシュアップしていき、参加者の所属や学年が変わるたびに全体の雰囲気も変わった。ひとつとして同じ状態になることはなく、成果物としての作品にも子どもの数だけ多様な表現が生まれた。また、これまで接する機会がなかった放課後児童クラブやふれあいスクールの子どものためにリーチできたことも成果のひとつと考える。

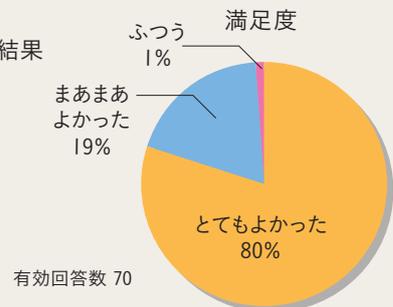
※ワークショップ原案：井川惺亮氏(現代美術家、長崎大学名誉教授)



会場の様子



■アンケート結果



B 「かんたん絵本づくりワークショップ」

■主催：新潟市新津美術館、坂井輪地区公民館

■実施日：8月1日(土)

■経緯と内容

前述の「えのぐでなにができるかな」が休館に際して新たに開発したプログラムである一方、以前から当館で行っていた人気プログラムを館外に持ち出して実施した例についても紹介する。

新型コロナウイルス感染症が流行した期間、来館者同士の接触を避けるため、当館でも制作系のワークショップを実施できなくなった。その後、当館における制作系ワークショップが途絶えないようにと2022年に新たに開発したプログラムがこの「かんたん絵本づくりワークショップ」である。本ワークショップは、当館で絵本原画展等を開催する際に関連イベントとして年に2~3回開催し、毎回定員を大幅に超える応募があるほど人気の講座であったことから、休館中にも館外で行った。業務効率化のため、坂井輪地区公民館が夏休みの時期に毎年開催している工作教室と連携して同公民館で実施した。

■材料・道具

- ・パソコン(ワープロとして使用)、プリンター
- ・はさみ、のり、鉛筆、消しゴム、色がみ、色鉛筆
- ・絵本の作り方を記した模造紙、お手本
- ・白い絵本(参加者1人につき1冊を400円で販売)

■事前の準備

事前申し込み制とし、参加決定者には事前にお話を考えるためのワークシートを郵送した。

■プログラム

- 8時30分～ 会場づくり(参加者の席、材料・道具を準備)
- 9時15分～ 受付開始、事前に配布したワークシートを回収してコピーし、返却
- 9時30分～ 挨拶、自己紹介、美術館の紹介、絵本の構造と作り方の説明
- 9時45分～ 各自が制作スタート
 - ・ワープロ系の職員は、コピーをもとに文章を打ちこんで印刷する
 - 参加者は印刷された文章を切って画面に貼り付ける
 - ・お手伝い系の職員は、参加者の要望に応じて色がみを切るなど制作を補助する
- 11時25分～ 一度ストップし、完成した参加者1名が発表
- 11時30分～ アンケート用紙に記入、材料と成果物を持ち帰る袋などを配布
- 12時まで 残って制作を続ける参加者が多かった

■参加者の声(抜粋)

- ・「はさみやさん」など、スタッフの人たちが手伝ってくれるので簡単に作れました。
- ・(色がみをのりで)貼るのは簡単だったけど、考えるのは難しかった。
- ・家で絵本を作ったりすることはたまにあったけど絵を切って貼るといふ発想はなかったからすごいと思いました。うまくできるか不安だったけどイメージ通りに作れたので良かったです。これからも絵本を作ってみたいです。
- ・いろいろなものを重ねるときれいに貼れた。今度は10ページくらいの本を作りたいです。
- ・いままで本を作ったことがなく初めてだった。絵本を描いている人は大変だなと思った。

■まとめ

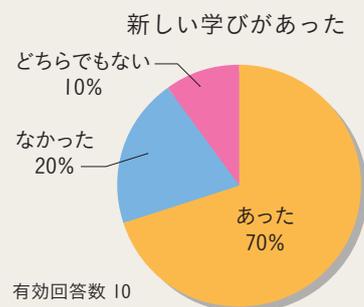
事前に案内していたこともあってか、自宅から模様紙やペン、水のりを持参して使用していた参加者が多く、色がみを切って貼る子、全て色鉛筆で描く子など表現方法は様々であった。1時間で1冊を完成させた子もいれば、1ページをじっくり作る子もいた。

事後アンケートの満足度が高かった一方、参加者に「美術館に行ったことがあるか」と尋ねたところ11人中ひとりしかおらず、「美術館って何?」と聞き返す子もいた。裏を返せば、今回のアウトリーチが美術館の良い宣伝になったといえる。こうした実情をとらえ、将来の来館者を増やすためにも、如何に子どもたちに美術や美術館に親しんでもらうかを考慮しながら、教育普及活動が続けていきたい。



会場の様子

■アンケート結果



C 「美術講座リバイバル」

当館では、学芸員が日々の研究成果などについて紹介する「美術講座」を毎年開催している。過去の講座で使用したスライドや読み原稿などの蓄積が残っていたことから、休館中これらを活用して追加でアウトリーチ活動を行えないかと考えた。準備段階で休館前に市内の社会教育施設へ相談に行ったところ、市民向け講座の講師を探していた公民館の需要と会場を探していた当館の供給がマッチし、連携事業として当館学芸員が講師を務めることとなった。その際、公民館のリクエストに応じたテーマの講座をこれまでのアーカイブから選び、内容を一層分かりやすくしたダイジェスト版へと再構成した。また業務効率化のため、申込受付やチラシの作成・配布などは美術館と公民館で役割を分担した。結果として、当館から20km以上離れた西区の公民館では普段当館を利用しない層にもリーチすることができ、当館が所在する秋葉区内の公民館では普段から美術館に親しんでいる方々に休館中も継続して市民サービスを提供することができた。

■プログラム(一例)

講座の1時間前 準備(マイク、パソコン、プロジェクター、椅子等を設置)

講座の30分前 受付開始

講座(質疑応答、アンケート回答を含めて90分間)



会場の様子

■参加者の声(抜粋)

- ・美術鑑賞は好きで美術館に通っています。(学芸員の)話を聞くのは初めてのことで、とても良かったです。
- ・普段聞けない話が聞けて良かった。様々な作品もよかったです。また機会があれば参加したい。
- ・実際に巡礼で使用した資料を見せていただき、講座の内容にいつそう深みが増しました。

1. 「坂井輪シニアカレッジ」

■主催:新潟市新津美術館、坂井輪地区公民館(連携事業)

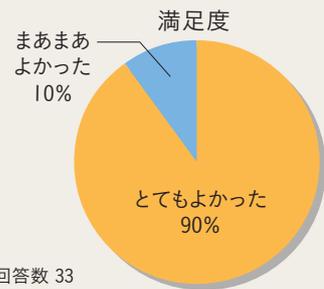
■実施日と講座のタイトル

7月4日(金) 第1回「やなせたかしの哲学」

9月5日(金) 第2回「描かれた世界遺産」

10月3日(金) 第3回「スペインの巡礼路で出会う大聖堂」

■アンケート結果



会場の様子

2. 「秋葉区の学び 秋葉区の美術と史跡」

■主催:新潟市新津美術館、新津地区公民館(連携事業)

■実施日と講座のタイトル

10月25日(土) 第1回「新津出身の漫画家 高野文子」

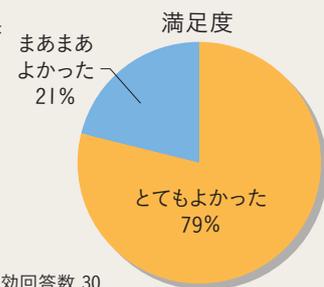
11月1日(土) 第2回「文化探訪—古津八幡山遺跡と新津油田金津鉞場跡…」

11月8日(土) 第3回「新津美術館と笹岡一」

■参加者の声(抜粋)

- ・高野さんのすごさを改めて実感できた講座でした。今まで気づかないで読み進めてきたところも、いろいろな技術的なものが詰まっていたことを知り、もう一度じっくり読んでみようと思いました。
- ・身近にも遺跡があることを再認識した。誇ってもよいと教えてもらった。
- ・笹岡一のことをもっと知りたいと思い参加しました。いろいろと話を聞き、新しい発見もあり、良かったです。

■アンケート結果



執筆:山岸亜友美(新潟市新津美術館 学芸員)

新潟市新津美術館
長期休館中の美術館活動ノート

発行日／2026年3月16日

発行／新潟市新津美術館

編集／長島彩音（新潟市新津美術館 学芸員）

印刷製本／株式会社山田写真製版所

デザイン／立壁純一（株式会社山田写真製版所）

発行者の許諾なく転載、複製することを禁じます

No part of this publication may be reproduced or reprinted
without written permission.

©Niitsu Art Museum, 2026



NAM

NIITSU ART MUSEUM

